

序章 十世紀文学における「語り」と「書記」の問題について

本書は、平安時代、中でも九〇〇年代に成立（あるいは、成立基盤を持つ）文学作品を対象に、その「語り」と「書記」のあり方について考察したものである。具体的には、歌物語とジャンル分けされる『伊勢物語』と『大和物語』、現存する物語作品としては最古の長編である『うつほ物語』、そして、『枕草子』の四作品を対象としている。なぜ、これらの作品であるのか。一つには、文学史的にはバラバラのジャンルに位置付けられる作品であるがゆえに、見過ごされてきた関係性を見直すためという意図がある。もう一つ、平安時代のみならず日本古典の最高傑作とされる『源氏物語』より前に成立した作品の意義を見直すことで、『源氏物語』もまた数々の先行作品の蓄積のもとで成立したことを改めて見直したい、という理由がある。

前者は、大学を含む学校教育における日本文学史が、ジャンル分けされて教えられることによって、同時代性を捨象しかねないことへの違和感による。現在、筆者が教えている日本文学史の授業で使われているテキストでは、和歌、物語、日記、随筆、説話、歌謡とジャンル分けされている。それぞれのジャンルで平安初期から院政期までの作品が並んでいるわけだが、それによってジャンルを超えた同時代性や近い時代における作品の相互影響関係が見えなくなってしまう。もちろん、文学「史」である以上、最初に年表が示されているものの、

記したものを基盤としている以上、口承の「歌語り」を信用するわけにはいかないことを、第四章では、醍醐天皇皇女、柔子内親王の和歌が「省筆」されることに注目し、作り物語における省筆との関連性を指摘し、「書き記さない」ことで喚起される物語世界の意図を論じた。

第二篇では『うつほ物語』を対象として、「語り」と「書記」から考察した四編をまとめた。第一章では物語内に描かれる藤原兼雅には、歌物語における色好みの主人公像が重ねられており、兼雅にまつわる女性との描写は「歌語り」的であることから、そうした一世代昔の主人公の造型を持つ男性登場人物は、この物語の主人公とならないことを論じた。第二章では、『うつほ物語』における膨大な会話文には音楽性が関わり、「声」を「書記」しようとする挑戦であったこと、一方で〈絵解〉の文章は、語り手による「語り直し／語り加え」であることを論じた。音楽を主題とする物語作品において、単に音楽を表記しようとしただけではなく、多様な「音」を「書記」しようとしていたことの重要性はあらためて考えられるべきであろう。第三章においては、第二章で論じた会話文のうち、「内侍のかみ」巻における朱雀帝と仁寿殿の女御の会話をとりあげ、朱雀帝が「語る」ことによって立ち上がる世界が、物語にどのような意味を与えるのかについて考察した。第四章では、「書記」の問題から、和歌をものに「書きつく」という表現に着目し、『うつほ物語』独自の「書きつく」行動の意図と、それとは異なる使い方を『源氏物語』を論じた。

第三篇は『枕草子』を対象とし、第一章・第二章では中宮定子における長い語りがなぜ書き記されたのかを考察した。第一章で取り上げた「清涼殿の丑寅の隅の」章段と第二章で取り上げた「殿などのおはしまさで後」章段は対応しており、前者は中関白家隆盛の時期において、定子自身が自らと清少納言を筆頭とする女房集団を中心とした新しい文化を立ち上げるべく、定子の長い語りがあったことを、後者では道隆の死後、長徳の変の暗い影が落ちた時期において、清少納言の再出仕により定子を中心とした輝かしい文化サロンを再び営むべく、そのために必要な集団の融和を女房たちに自覚させようとするために定子の長い語りがあったことを論じた。第三章では「雪山の章段」において「語りの場」が示されていることに注目し、定子と清少納言たちの「雪山の賭」を語るのが、清少納言ではなく一条天皇と定子であると「書記」して残すものであったことを論じた。以上、三作品を通して、「語り」や「書記」をテーマとして、ある作品同士においてはその影響関係も考慮にいれながら論じたものである。

「語り」と「書記」、このテーマによって九〇〇年代を見通す作業は、今後も継続しなければならない。今回、取り上げた作品研究の深化はもとより、まだ着手できていない作品へと視野を広げたい。特に、日記に関しては『土佐日記』、『蜻蛉日記』の二作品、物語では、『平中物語』と『落窪物語』、そして、九〇〇年代半ばに流行する物語的私家集の存在である。物語的私家集は歌物語からの発展でもありながら、『蜻蛉日記』へ継承され、さらには『和泉式部日記』へつながる。『和泉式部日記』が物語とも読めるのは、こうした文学史的連携があるからである。

一方で、現実的な記録のように見える『土佐日記』にも和歌は不可欠であり、『落窪物語』においても落窪の姫君の詠む和歌が道頼の心を動かしていく。近年、残念なことに九〇〇年代成立の古典作品への研究成果は減少の一途である。『竹取物語』を含めれば、『伊勢物語』、『土佐日記』、『大和物語』、『蜻蛉日記』、『枕草子』…中等教育における教科書に掲載されている作品の多くが、作品による差はあれども活発に研究されていない現状では、

古典文学の「延命」は果たすことが出来ないのではないか。古典文学であつても読んで面白く楽しいこと、現代人の美意識に古典文学が関与していることなど、中等教育において伝えてほしいことは多くある。本書ではそうした問題意識を反映することは出来なかつたが、改めて九〇〇年代作品への見直しが急務であることを本書によって提起しておきたい。

第一篇